

日本における女子サッカーの活性化を図る要因の研究

A research of factor to attempt activation of Women's soccer in Japan

1K04B008-1

天野 実咲

指導教員

主査 間野義之先生

副査 石井昌幸先生

目的

本研究の目的は、日本における女子サッカーの活性化がなぜ上手く図れないのか、その問題点を明らかにすることにある。そのために、まず世界の女子サッカーの歴史を調べ、その中でも特に女子サッカーのプロリーグが存在したアメリカに着目した。また日本における女子サッカーの歴史を把握し、現在に至るまでどのように発展をしてきたのかを理解する。その上で、現在どのような現状にあるのか、活性化が上手く図れない問題点を挙げ、事例を取り上げることによって、より問題点を明確にする。研究過程において、特に「なでしこ vision」に注目し、日本サッカー協会がどのようなビジョンを元に女子サッカーの普及活動を行っているかも明らかにした。

方法

研究方法としては、女子サッカー、日本の女子サッカーに関する文献、論文、インターネットなどを利用した。

結果

本稿では、まず、世界の歴史、その中でも特に女子サッカーの活性化が学校中心に行われたアメリカについて検証した。

女子サッカーの歴史は、男子サッカーのそれとほぼ同じ時期に始まったが、「サッカーが女性の体に対して有害である」という科学的根拠のない理由により、一時期活動停止を余儀なくされた時期があった。これは、諸外国に見られる事象であり、日本においても一時期見られた。第2次世界大戦後を機に、女子サッカーの機運がまた復興した。1971年には初の国際試合が行われ、FIFA ランキングはこの大会以降の成績を累積させた結果として、毎年4回更新されている。FIFA が女子サッカーの大切さに気がついたのは1986年にメキシコで行われたFIFA 総会以降である。この総会でのスピーチにより、当時のFIFA 会長であったアベランジェ氏が関心を持ち、1988年に非公式な大会をそして1991年には初の女子ワールドカップが行われる運びとなった。その後1996年のアトランタ

オリンピックでは公式競技として迎えられた。現在では、西アジア女子サッカー大会などイスラム文化圏でも活動が見られ、FIFA 加盟国数は147カ国・地域となっている。

考察

今回、この研究を行ったことから分かったことは、やはり環境という要因が女子サッカーにおよぼす影響が多大であるという点である。

環境要因といった場合には、いわゆる「環境」というグラウンドや施設等の問題点と「待遇」といったプロかアマかなどの要因とに分けることができる。この2つは交互に関係しており、どちらかが満たされればよいという問題ではないことを理解することができた。特にグラウンドや練習施設は今後、女子サッカーを活性化していく上での検討課題であり、その解決方法の一つとして、Jリーグのすべてのチームの参加にレディースチームを作ることを提案したいと思う。イギリスのプレミアリーグのように各プレミアリーグ傘下にレディースのチームおよびカールズのユースチームを作ることが今後求められる。特に、日本という立地条件が特殊な環境下にあり、容易にスタジアム等の建設が行えない国においてはある程度の男女間での施設共有が望まれるだろう。

また、処遇に関しては、今後もプロとアマの2つの選択肢を残しておくことが、女子サッカー界の発展に大きく寄与するだろう。そして、選択肢を残しておくことは、多くの女性サッカー選手に対しても様々な可能性を残すこととなり、今後女性サッカー選手数が増加されるものとみこまれる。

この2つを軸に今後女子サッカーの活性化を行うことが、より多くの女性サッカー選手を生み、そして、「なでしこリーグ」が多くのファンを魅了する世界レベルのリーグへと発展していくために必要であると提言する。

今後より多くのサッカー選手が生まれるために、選手だけでなく強化関係者、また男子チームが協力し合い、より多くの人を魅了するサッカー社会を構築することが求められると考えられる。